＜研究ノート＞

オーストリア文学ノート(3)

——C. マグリスの論文について[二]，フリードリヒ2世像とハプスブルク神話——

藤　井　　忠

マグリスによると，ハプスブルク帝国の神話化が始まったのは19世紀初頭ということである(第一章「ハプスブルク神話の成立」)．神話を構成するモチーフは，帝国がいぜんとして一大強国であるもののもうすでに没落の時に近づきつつあった十九世紀のはじめの数年間には，事実上できあがっていた[P. 35][1]．神話化は，作家の内面とかかわり深かまり(その様は第二章「ビーダーマイヤーの時代」で描かれる)，そしてグリルパルツァーにおいて，ハプスブルク神話の諸モチーフは集約され，神話とその悲劇性は最も完璧に体現される．と同時に，後世に向けて，グリルパルツァーの文学自身がさまざまな比喩のあらたな源泉となり，神話の壮大な統一的構想を提示する[P. 150]．したがってマグリスは，六章より成る本書の第三章をそのグリルパルツァーにあて，しかも「フランツ・グリルパルツァー，秩序と時代」という形で，この章のみ固有名詞をタイトルとする．いまやハプスブルク帝国の神話化は，諸々のものを破壊していく時代の流れを敏感に感受する一作家の，普遍的秩序を維持せんとする絶望的な試みの表現となるのである．第四章「ハプスブルク的郷土文学」において，素朴な田園的生活を背景にハプスブルク国家について家庭的な居心地のよいというイメージを生みだしていく傾向が取り上げられ，ダイナミックな近代化の動きに対して，その破壊的な要素から遠く離れた牧歌的空気のなかでの現実の変容が問題化された後，第五章「オーストリアの終焉」へ，世紀転換期へと入り，そして第六章「昨日の世界——今日の世界」で，第一次世界大戦後の文学状況，ハプスブルク帝国崩壊後のハプスブルク神話の諸相が描かれる．

事柄はこうして，「帝国の終末が近づくにつれて，いよいよはっきりとした輪郭を浮かび上がらせる」[P. 35]のだが，「序論」と第一章一「ハプスブルク神話の起源と政治的機能」においてすでに問題はかなり具体的に示され，進展の方向は，前回も述べたことだが，はじめに定められている．転がり落ちていく傾斜を坂の上から見下ろすようなものである．読み手はさまざまの現象のなかから取り出される神話化の様相，色とりどりの，しかし基調においては一様の風景をつぶさに眺めながら，終末へと集中していくことになろう．

だが今回読み直したときに，発端のところで足が止まってしまった．マグリスは，神話の成立過程を述べるにあたって，第一章・二「啓蒙的絶対主義の時代とその文化」において，その一つ前の世紀に遡っている．だが，18世紀がどうであったかということよりも，19世紀の政治的環境に育った世代が，マリア・テレジアを追想するときに，その躍動的側面を無視して彼女をいかに古くさい中庸と均衡の枠に押し込んでしまったか，ということを問題にしていく．「序論」が第一次大戦後に滅亡した帝国を想起するオーストリアの作家たちの視線を辿ることから，現実の変容・帝国の神話化の特徴的面をまず取り出して叙述を開始したのとそれは軌を一にする．マグリスは一貫していると言わねばならない．

だが，マリア・テレジアの世紀が言及されるとともに，もうひとりの人物が浮かんできたのだった．ハプスブルク的精神として理想化された徳目のなかで，マ

グリスが格別重視するのは「中庸」「不動主義」「荘重なる静力学」の概念であり，すでに「序論」及び第一章一においてはそれら徳目の担い手として，日々己の職務を忠実に果たす「官吏」が，さらにその見事な形象化としてグリルパルツァーの『主君の忠実な下僕』の主人公が挙げられたが，いま浮かびあがらんとしている人物は，エキセントリックではあるがその官僚的形姿の原型とも言える生き方を提示した男なのである．彼は官僚制度の確立を行なったばかりではなく，自分自身をも官吏に，すなわち「国家第一の僕」に，過激に変えたのであった．そのうえ彼の打ち建てた王国は，ハプスブルクの帝国を徐々に圧迫し，ついに19世紀後半には帝国に軍事的にも苦い屈辱を味わわせるに至る．そのようなことがまたハプスブルク神話にも影響している．

すなわち新興国プロイセンを一躍ヨーロッパの列強に加えたあのフリードリヒ2世(1712-86; 在位1740-86)の姿が浮かんできた．自己の職務に勤しむ孤独な形姿と機敏で仮借なき現実主義的行動，反マキアヴェリ論を書いた男のマキアヴェリズムなどが．これにくらべると，13世紀より，幸福なるオーストリアよ，結婚せよ，の言葉に則って主として王家間の婚姻政策によってヨーロッパにさまざまに領土を拡げてきた王朝の巨体はいかにも物憂げに感じられる．1740年，女性としてはじめてハプスブルクの世襲領地を継ぐマリア・テレジア(1717-80)が何よりもまずなさねばならなかったのは，この新しいタイプの君主との戦いだった．つまりヨーロッパの北の辺境の地から彼女の継承に口出ししてきた皮肉っぽい理知の男，愛していない妻を放置して禁欲的な独身者的な生活へと自己を閉じこめる四十間近の男，従来の王朝のあり方を嘲笑しつつ領土拡張と国家建設に熱中する合理的野心家と戦うことであった．当時，彼女は23歳の若さであり，生涯彼女は彼を敵としなければならなかった．たいていは身重な体にありながら彼女はじつによく戦った．こう綴ってくると，プロイセン対オーストリアの例の図式に行き着きそうである．

しかし，彼と戦ううちに彼女もまたあの男に似てきはしなかったか．

一方で十数人のわが子の行く末に心を配り，家庭の幸福を願いつつ，彼女もまた，精魂こめて活動した．彼女もまた，官僚組織と軍隊の改革に打ち込み，各所領を統一国家に改造しようとつとめのだ．そして母の意志を受け継いだ息子ヨーゼフ2世は，プロイセンの王と同じように，余は国家第一の僕なりと考えていることを言明したのである．また官庁におけるラテン語の使用を禁じ，ドイツ語習得を義務づけ，国民文学の意識を喚起するのも彼である．

「この張りあうドイツの両国は，なんと著しく似たものとなってしまったことか．」(マイネッケ)「プロイセンとオーストリア」の，「と」は，対立のみをひたすら表わすものとは受け取れなくなってくるであろう．そこには18世紀ヨーロッパに共通する流れが見えてこよう．あるいはドイツ語圏独特の歴史的発展の共通問題が底に存在することがうかがえる．にもかかわらず，両者はやはり対立しているのであろうが，まずフリードリにしばらく目を注がなければならない．

【フリードリヒ像】

マリア・テレジアが結んだフランス・ロシアなどとの大同盟の包囲のなかで，フリードリヒ2世はこれら列強を相手に7年間耐え抜いた．『詩と真実』は第7章で，プロイセン王と七年戦争を取り上げているが，フランツ・メーリングはそのゲーテの文に「伝説」の萌芽を見たのである．

「ドイツの文学の中に初めての真の，より高い，本来の生命内容がはいりこんだのは，フリードリヒ大王と七年戦争の事蹟とによってであった．どんな国民文学でも，人間的に第一級の者だとか，国民とその指導者とが一致団結する場合のそれら両者の出来事にもとづかないかぎり，つまるところ浅薄なものであり，また浅薄なものとならざるをえない．」(244)ゲーテはさらに，「しかしわたくしはここで，正真正銘七年戦争の産物であって，完全な北ドイツ的国民内容を持つ或る作に，なによりもまず敬意をもって言及せずにはいられない．それは，人生の重大事に取材した最初の戯曲，特殊な時代的内容を有し，それだけにまた測りしれぬ影響をあたえた作品『ミンナ・フォン・バルンヘルム』である」(245)と記す．

このようなゲーテの言葉によってフリードリ2世は国民文学に大きく影響を与えたドイツの君主とされ，そればかりか，よりにもよってドイツ啓蒙主義の代表者レッシングが，この軍国主義的プロイセンの専制君主と関係づけられて19世紀の文学史において記述されるようになったことを，フランツ・メーリング(1846-1919)は『レッシング伝説』(1893)において問

題化していく[3].

例えば，ベルリン大学教授ヴィルヘルム・シェーラー(1841-86)の『ドイツ文学史』(1883)を開くと，その第11章は「フリードリヒ大王の時代」として，レッシングやイタリア旅行前のゲーテ，若きシラーなど生気あふれる時代をそこで扱う．フランス文化に傾倒し，ドイツ文学に冷ややかな態度をとった大王であるにしても，国内および対外政策をとおして「力強くドイツの文学を促進し」，いたるところに「衆目を自分の方へ牽きつけ，活気づけ鼓舞し，覚醒せしめかつ激励し，諸侯の音頭を取り，作家に題材をていきょうし，そして名声世界に高く，敵といえども嘆賞おしまない一人の英雄として凡ゆるドイツ人に君臨した」と，大王の功績がそこで称えられている[4].

本来ならその進歩的要素からして市民階級からやがて労働者階級に受け継がれるべきレッシングの文学が，反動的な文学史のなかに囲いこまれていくことをメーリングは「レッシング伝説」として問題にするのだが，レッシング伝説はまた一方ではフリードリヒ伝説でもある．

その伝説を崩すためにメーリングは，王を啓蒙主義者レッシングの精神的同志にするために用いられる王自身の言葉に王の政治を突きつけて，「啓蒙君主」の言葉とその現実政治とのギャップを示す．その第一は，あの「君主は国家第一の僕である」の名言である．ルイ14世が「余は国家なり」と言うとき，すくなくとも国家に対する君主の倫理的責任はそこで認められており，彼はまたこの責任を実際に負わねばならなかった．だが君主が自分を国家の下僕にするときには，絶対主義国家においては君主のあらゆる責任は泡のごとく無内容になってしまう．ところが責任の溶解とともに権限の具体的限定は消えて，彼はすべてを自分の目で見，国家のすべてを自分で統治する存在となる，とメーリングは述べる．その他，警句乱発の性癖をもつ才知ある権力者独特の皮肉をこめた言葉，「余は貧しき者たちの王となる」「新聞を困らせてはならぬ」「余の国では各自自己の流儀にしたがって天国へゆける」という，国民の福祉・言論の自由・宗教的寛容を表現する言葉の裏側の現実をメーリングはひとつひとつ提示していく．

フリードリヒのこの二面性を，別の角度から執拗に問題化したのは，フリードリヒ・マイネッケである．若き日にマキアヴェリを批判し政治家としてはマキアヴェリの使徒であったフリードリヒの「分裂」，「二つの精神」，「人道的思想と権力国家思想の二元論」に集中することによって，マイネッケは『近代史における国家理性の理念』(1924年)において，近代国家と近代の政治の問題，マキアヴェリズムに迫っていく[5].

「国家第一の僕」に関しては，マイネッケは，『反マキアヴェリ論』ではフリードリみずから「人民の第一の僕」と称していたのが，後に「国家第一の僕」という言葉が現われてくることを捉えて，この「人民」から「国家」への推移こそ，近代的思考及び近代的国民国家に向かう方向を指示していると見る(P. 276)．現実的経験は彼に，ますます「国家を優越的で強制的な生活力として，つまり，君主を導くとともに臣民や人民の幸福をも制約し包括する全体組織として」認識することを教えたのだと(P. 277)．マイネッケは，この移行のうちに，つまり彼の内に生じる「哲学者」と「君主」という厳しい二元論のなかに，普遍的倫理的理想と国民国家的権力的思想の対立の姿を見る．啓蒙主義的倫理はむしろ合理主義へと傾き，権力政策の倫理化よりむしろその合理化へ向かうことを，指摘するのである(P. 269)．そしてフリードリヒは「自分自身をも合理化し」，自分を国家第一の僕に変えようとしたのだったと(P. 240)．

ところで，マイネッケはによれば，現実の権力行使の様相は別にして，国家というものに関する本来のドイツ的思考には国家理性やマキアヴェリズムに特別の意味を認める傾向はなかったと言う．「マキアヴェリのような人物は16世紀のドイツでは考えられなかったであろう」(P. 369)と．外国のものと感じられた国家理性論が17世紀のうちにドイツに侵入したのは主として三十年戦争の経験によってである．しかしそれはまだ英仏の権力者の模倣でしかなかった(P. 369)．それがはじめて，哲学者としてまた権力政治家としてフランスから学ぶことを心得ていたフリードリ大王において内面化する．「権力のない困窮した状態から権力と独立に向かって努力すること，これが，ドイツにおけるマキアヴェリズム的思想や方式の受容にたいするもっとも内面的な現実的刺激であった．」(P. 369)とともに，「国民的統一と独立にたいする，ますます増大する渇望」が，「権力にたいする要求」をいっそう明確に強調しなければならなくなる(P. 370)．このマイネッケの叙述からすると，フリードリは辺境の後進国が権力と独立をいかに獲得するかの問題を自分自身の

内部に取り込むことによって，近代国民国家のデモーニッシュな傾向をも受け入れ，それによって歴史的にも重要な第一歩を踏みだしたということになる．

この王の内側を独特の筆致であばき，あばきつつ大王に関する新たなイメージを生む，あるいは既存のイメージをある観点から独特に強調することで，いわばひとつの新たな伝説を書きあげたのは，トーマス・マンの『フリードリヒと大同盟』(1914)である[6]．マンの叙述は，マイネッケとは異なるが，やはりひとつの対立形式を下敷きにしている．個のあくなき追求，禁欲的な生活様式がここでも，しかし執拗で皮肉な光のもとに明らかにされる．マンが若き日より追ってきた問題が姿を変えて現われているのである．芸術家的資質の男が現実に権力の位置につくとき，己には不相応な立場に必然によって立つとき，熱烈な兵士にして勤勉なる官吏となり，敢然と戦い，歯をくいしばって日々の己の職務に勤しむが，しかし内的分裂はけっして癒されているのではない，という禁欲家の問題，つまり弱さのヒロイズムの問題がここにも現われるのである．「今日の時局のためのスケッチ」という副題が付けられているように，第一次世界大戦に突入したドイツの側に立ち，ドイツ精神の擁護をしつつ，そのディレンマのなかで自己の精神的根拠を探る作家マンの，逆説的な叙述が独特の切実さを示す．

「文学的気質の化身が，絹のガウンを着た文学精神が王座についたということだ。」(P. 53)これでポツダムの軍国主義は終わりと人々は思い，新しい王に期待したが，期待ははずれた．「柔弱でかなり淫蕩な若き哲学者が，さなぎから脱した．そして(･･･)熱烈な兵士となりかわったのである．」(P. 53)

父王の道楽同然であった軍隊が新しい王のもとで突然「国家の力」に変えられていく．巨人連隊は廃止され，軍隊からいっさいのこういう珍奇な見せ物的な付属物は除去され，機動性と戦術的な精確さを第一にする軍隊にすべく，「真剣な実戦訓練」が繰り返される(P. 59)．軍隊をひたすら攻撃，「ただ攻撃あるのみ」のものにすべく実戦向きに変える．彼自身については，自己の日々を，修道僧のそれに変える．夏は朝の3時に起きて，あらゆる領域にわたって政治の仕事にとりかかる(P. 63)．「すべての聖職者を憎悪し軽蔑していた」彼が，「青い軍服を着た修道僧」になる(P. 63)．そればかりか，輩下の将校たちにも「戦争の修道僧」になることを求めた(P. 65)．なぜか．当時のヨーロッパ諸国の様子と相互関係が，ひそかな憎悪が，フリードリヒの刺を含んだ視線から見たものをまじえながら，延々とマンのタッチで描かれる．「この貧しき若きプロイセン」が，オーストリアに対抗し，対等の国家として立ち，今後ヨーロッパのあらゆる重要事件に関しては強国として対等に発言することを，彼は自己に課したからである．文の流れは，ヨーロッパにおいて孤独な，そして狡猾なフリードリヒを内部から押し進めるそのような必然を浮き立たせていく．必然に促されての，ただ攻撃あるのみであり，ヨーロッパ強国の大同盟に包囲された孤独者の先制攻撃は，大戦へと突入したドイツと二重写しにされていく．「戦術論において攻撃的防禦というようなことがいわれるとすれば，同様なことは外交の分野においても終始起きるように思われる」と(P. 70)．彼はいまや世界から憎まれる男である．しかも，フランスとオーストリアが，つまりブルボン王家とハプスブルク王家とが同盟を結ぶことはないと考えて行為を決意した，彼自身の判断の誤りによってもたらされた苦境に彼は耐えなければならない．そして彼は歯を喰いしばって耐る．唯一彼を支えるものとして，マンは，この男の「倫理的な過激さ，彼の決意の深さ」を挙げる．「彼の倫理的な長所は，彼が生命を賭していたという点である．」(P. 98)つまりすべてはフリードリヒの内部に起因するのだ．「決意」とか「生命を賭す」ということが，すべてを越えて意味をもってくる．パトスとイロニーとの間で叙述してきたマンは，このような非合理的なものに激情的に集中していく．耐えることについて，マンは次のようにも言うのである．「この試練に耐えるためには，われわれの知るかぎりでは，この後にも先にも誰も示したことがないような，また示す機会を持ったこともないような，受動的でしかも能動的性格や，大いなる堅忍持久の精神と創造的活動的エネルギーが必要であった」と(P. 97)．

苦境のなかでしだいに高まるフリードリヒの声望を記すマンの言葉は，フリードリヒ伝説にひそむグロテスクさを映しだす．彼は「急速に老いていった．歯は欠け頭は片側が真白になり，(･･･)身体は通風に苦しみ，萎縮した．(･･･)しかし．この間に彼の声価は高まった．――彼の犯した罪は，彼の国際法侵犯は忘却の彼方へ沈んでいった．しかし彼が神に鍛えられしもの，神に選ばれしものであるとの声価は大樹のごとくにますます高く聳え，その影は世紀を覆った．」(P.

98)　マンはしかし，フランス軍を打ち破ったということ，それによってドイツ国民共通の英雄になったということだけがフリードリの声価の内容ではないと言う．むしろ，「彼の行為と苦悩とがあらゆる国民の同情と熱狂的な人気を博せしめた」と言う(P. 98).

苦悩・敗北が問題なのである．例えば『悩みのひととき』(1905)の主人公は，苦しい自己認識の後にこうつぶやく．「苦悩が無駄であったということがあってよいものか．苦悩は俺を偉大にせねばならぬのだ」と．登場人物に醜い肉体と一種尊大な態度及び気難しさを付与し，頽廃のグロテスクを描きだすマンは，グロテスクと偉大さを次のように結びつける．「彼という存在の異様(グロテスク)さは，(･･･)その形姿を偉大にし，庶民的なものにするにあずかって力があった．(･･･)彼は生けるままにして伝説中の人物となった．それ以後彼は〈老フリッツ〉と呼ばれた．」(P. 98)

「彼は犠牲者だった」と，マンは最後に言う．「彼に哲学者たることは許されず，王であらねばならなかったのだ」と．この自己犠牲の意識が，平然と他人の没落を眺める冷酷さにもつながっていくことは，マン研究家スターンの指摘するとおりだ[7]．

スターンは国民に犠牲を要求するヒトラーとの関連で述べているのである．ヒトラーは最後の数年間，フリードリヒ大王に理想の政治家を見て，大王に関する書物を読みあさったようである(スターンは，マンのこの評論を読んだとは考えられないと書いている)．ベルリンのヒトラーの殺風景な部屋の壁には大王の写真が飾られていたとも言われている．スターンが問題にするのは，自己犠牲であると同時に他への犠牲の要求でもある，この犠牲の過大な重要視が，つまり「犠牲症候群」が，そのままヒトラー独自の自己様式化と，後に発展するヒトラー神話のひとつの側面を先取りしていることである．しかしここでは，フリードリヒをめぐる伝説がどのような志向を内にもち，それがどのような形で表現されていくか，その方向を見るにとどめたいのである．「個」の飽くことなき追求，あるいは「主観」・「決意」のデモーニッシュなまでの肥大をそれがはらんでいることを確認しつつ，フリードリヒ伝説から離れることにしたい．

【フリードリヒ像とハプスブルク神話――官僚的形姿をめぐる対比】

フリードリヒのシュレージエン侵攻に対するマリア・テレジアの戦い以来，プロイセンに対する対抗意識はハプスブルク家のあり方や観念世界に影響を与えていく．とくに19世紀に入り，ハプスブルク帝国の没落が色濃くなるとともに，プロイセンあるいはドイツへの意識は鬱屈したものとなり，そのなかでオーストリア的なものが強調され，理想化されていった[8]．しかし18世紀のマリア・テレジアは，フリードリヒ2世を心底から憎悪し，秘術を尽くし精魂こめて彼と戦かったのである．そうでありながら，当時一方では新興国プロイセンと古い王朝ハプスブルクとは国内政策において，軍隊と官僚の改革において同じ方向をとっていた．

「この張りあうドイツの両国は，なんと著しく似たものとなってしまったことか」，とマイネッケは先の『近代史における国家理性の理論』に書いている．「まさしくヨーロッパの諸国家相互の権力闘争は，諸国家の構造をたがいに平均化し，その利害を同一の方向に導き，古い時代遅れの形式や目標を除去し，そのようにしてたえず更新することを，昔からやりとげてきたのであった」と(P. 304)．マイネッケが捉えるのは，諸国の権力闘争を通じて生じるヨーロッパのダイナミックな展開の様である．激しい戦いのうちで両国は自己の近代化に乗り出した．オーストリアにおいてはマリア・テレジアから息子ヨーゼフ２世に受け継がれ，改革はよりラディカルな進行を示す．彼においてはもはや母の対フリードリヒ憎悪はない．そしてマグリスもまた，ヨーゼフ２世について，帝国のドイツ的一元化を推し進めようとし，国家の第一の下僕として日夜倦むことなく職務を遂行し，また一方では粗末な小屋にも馬を止めて立ち寄るという啓蒙主義的君主像をフリードリ２世の姿と二重写しにしている[P. 50]．

しかし19世紀，「善良なフランツ1世」の治世に入るやその反動が生じる．保守的雰囲気のなかで，女帝の時代の躍動的力強さは無視され，女帝像は中庸を旨とする古き枠のなかに閉じこめられる．人々は諦観と結びつく片隅の幸福に身を寄せ，政治上の憂は忘れて一時の享楽を味わおうとする．他方，ハプスブルク的忠誠が再登場する．それが意味するのは「臣従するという拘束関係のなかに自己を再び見出だす」ことであり，人は拘束によって「自己を無秩序な事態や放恣な感情から守る」ことを望むのだ．このいかにも封建的な心性は，「貴族的な痕跡をのこしたまま市民階級の次元に移され，官吏という人間像において具現される」こ

とになる[P. 76]．しかし，大革命とナポレオンによってヨーロッパは大きく動いており，状況はこの国に独特の国家的理念を打ち出させることにもなる．すなわち民族意識の高まりとともに，「諸民族のまとまりという，ほとんど信仰と同等の価値を与えられた理念」がそのころ意識される[P. 78]．超民族的中欧の神話の始まりである．超民族主義の理念は政治の道具となり，ハプスブルク世界の防衛の武器となる．

さて，今回のノートの本筋に戻って，ハプスブルク神話を構成するモチーフ超民族性・官僚性・享楽主義のうち，官僚的形姿を軸に，対比を試みたいと思うのである．マグリスはそれをしていないが，ともかく一度対置してみることにする．

「官僚性のテーマと直接結びつくのは，あの皇帝フランツ・ヨーゼフの神話である」とマグリスは言う[P. 30]．すなわち19世紀後半より20世紀へかけて没落していく帝国を苦悩と威厳にみちた姿で担い，まさに帝国の没落を背負うことによって，独特にハプスブルク的雰囲気を，あるいはハプスブルク王朝そのもののイメージを代表することになったフランツ・ヨーゼフ1世(1830-1916，皇帝在位1848-1916)に，官吏という人間像がもつ問題性が結びつく．軍服を身につけ，書物机に向かい執務に没頭するあの皇帝の姿に．

「余の国の諸々の民」と呼び掛けるフランツ・ヨーゼフ皇帝は，諸民族を包括する多民族国家の家長として，ハプスブルク神話において「超民族主義」のモチーフを一方で担う存在であり，その意味では，過激なまでに国民国家を志向したフリードリヒ大王の思想とはっきり対立する．いやむしろ，プロイセンが目指した単一の民族国家のデモーニッシュな動向に対して，超民族主義は多民族国家オーストリアの自己防衛のために必要である．『ラデツキー行進曲』(1932)においてこの老皇帝をみごとに描き，フランツ・ヨーゼフ皇帝の神話化に大きな役割を演じたガリチア生まれのユダヤ系作家ヨーゼフ・ロートは，1937年の評論『グリルパルツァー』のなかで，ということはつまり狂信的民族主義ナチズムが猛威を振るうヨーロッパ状況のなかで，近代の歴史を包括的な秩序の崩壊過程として，すなわち古い普遍主義的なローマ・カトリック的ヨーロッパの解体の歴史として解し，このような立場から，ルターからフリードリ2世・ナポレオン・ビスマルクをへて現代の独裁者たちへとつながる抛物線を想定するのである[P. 371]．だが一方，「官吏像」ということでは，ハプスブルクの皇帝はプロイセンの大王に近づくのである．

「もし官僚的軍隊的冷徹さと簡素さを維持し，義務感と国家の従僕という思想に徹頭徹尾献身することが旧来のプロイセン的要素の核であるとみるならば，例えばフランツ・ヨーゼフ帝は皇帝ヴィルヘルム2世やホーエンツォルレルン家のロマン的で想像力に富んだ他の幾人かの後裔たちよりも，はるかに『プロイセン的』であった」と，1914年にガリチアに生まれたウィーン大学教授ヴァントルツカは『ハプスブルク家』(1956)[9]のなかで述べる．

ケーニヒグレーツでの敗北によって屈辱を受けたハプスブルク家の皇帝の日常生活が「プロイセン的」であるということは皮肉にも思えようが，マイネッケが言った，ヨーロッパに見られる「平均化」，なかんずくフリードリヒにおける「自己を国家第一の僕に変えようとしたこと」すなわち「自己の合理化」が，ここでむしろ関心を惹く．マックス・ウェバーをもとにしながら言うと，事は，近代化，あるいは合理化であり，また非個性化・抽象化である．近代的合理主義的方向が，独特の形で，古い王朝的なものと合体して，帝国末期のオーストリアの状況のなかである役割を演じるのである．

そうした二つのラインの絡み合いについては，ヴァントルツカが次のようにそれを追っている．すなわちマリア・テレジアは「神の恩寵が明らかにこの宗家の上に宿っている」ことを確信していた．しかし，彼女の息子ヨーゼフとレオポルトはすでに，「プロイセン大王が簡潔に表現した国家の従僕という思想にみたされて」いる．「君主制の形而上的根拠づけは，合理主義的功利主義的根拠づけによって，とって代われた」のである(P. 200)．ヨーゼフ主義的国家思想への反動は，ヨーゼフの甥フランツのもとで始まり，フランス革命とナポレオン戦争の動乱のなかで，彼はハプスブルク君主の特殊な地位に関する王朝的な思想を唯一の拠り所とし，王冠の影の中へ再び逃げこむ(P. 210)．しかしヨーゼフ時代の何ものかは復古的な彼のなかにもすでにしみ込んでいたのである．復古的調と近代的傾向とが，彼において混じりいる．しかもこじんまりとした，家庭的な規模に縮められてである．フランツの考えからすれば，市民に義務と犠牲の心を吹き込み高揚させるのは「祖先伝来の王朝と神聖なる君主その人」への愛情と忠誠でなくてはならないのであるが，

さりとて彼にはもはや「バロック時代の宗教的政治的君主観のもつ威厳にみちた偉大さ」は息づいてはいなかった．そのような壮大な観念の代わりに，ビーダーマイヤー時代にふさわしく，「良き家長」「良き皇帝フランツ」のイメージに落ち着く(P. 210)．そのフランツは，ヨーゼフ体制の官僚制度を存続させ発展させた．しかも官僚制度というこの「非個性的な制度」が君主にとっても好都合な保護として，「遮蔽空間」として機能したのである(P. 211)．マグリスの言う「現実逃避」のために，官僚制度という近代的装置が古くさい体質の国家の君主に奉仕する．すなわちこの官僚制度という非個性的なものを一方の柱にする国家機関がそれ自らの意志に従って自律的に作用するということは，「不愉快な決定を回避」する可能性を，君主に提供したのであった(P. 211)．「のんべんだらり」[P. 27]とやって[長生き」をする(P. 210)という古典的な生き方を，帝国は没落の気配を漂わせ始めるなかでとる．しかし1848年革命のさなかに皇帝となったフランツ・ヨーゼフはまた違っていた．彼の時代に帝国の重心は東へと傾き，多民族国家の長として，帝国のかかえる多様な民族の要たることを意識しなければならない．そのような考えには，「君主一家が神の依託を受けたとする古来の純王朝的理念とヨーゼフ主義的国家の下僕という理念が流れこんでいる．」(P. 225)　帝国の諸矛盾と一家の恐ろしい運命を背負いつつ，最後はほとんど「書類が山と積まれた書き物机の生活」ばかりであるという形での禁欲的日々を送るこの皇帝は，こうして生活を義務の意識と国家の下僕という思想に捧げながら，「心の深奥では素朴で慎み深いひそやかな庶民生活の幸福に憧れていた．」(P. 229)．

古い神の恩寵の思想に官僚的要素が加わってできあがったハプスブルク的皇帝についてマグリスの書くところはこうである．

「恩寵，しかも遂行すべき職務として皇帝にのみ授けられる神の恩寵」，皇帝の権威に関するこのような「中世的解釈を，さらに独特のハプスブルク的なものに仕上げているのが，支配者が背負う重荷という，いわば官僚的側面である．帝冠は，そこでは，逃れることのできない義務，勤勉に雄々しく遂行すべき職務とされる．」[P. 160]「フランツ・ヨーゼフ1世の神話は，地上において神の代行をなす支配者の像と，深夜書物机に向かって仕事にいそしむ帝国第一の官吏の像から成り立つのである．」したがって，いまや国家の頂点に立つのは「それ自身はもはや責任を負うことなき存在」である[P. 161]．

敬虔と謙譲，義務と名誉は，ハプスブルク家の始祖ルードルフ1世の伝説的な姿がすでに表現していた．そして断念は，長い王朝の歴史のなかの挫折とともに，あるいは君主の冠を殉教者の冠と感じさせる悲劇的な事件とともに，幾度も体験されてきたところである．しかし断念と諦観，茨の冠としての帝冠のイメージは，帝国が衰退していくなかでその色を深めていく．だが古典的な断念と諦観以上に崩壊を支えるものが必要であった．先にも引用したが，「臣従するという拘束関係のなかに自己を再び見出だす」ということをマグリスは言う．人は拘束によって「自己を無秩序な事態や放恣な感情から守る」ことを求める．何ものかにひたすら日々仕えることで，崩壊から身を守らなければならない．近代においては，「官吏服務規定に自己を捧げることで個人的感情を表わさない人格，つまり秩序と規則そのものとなるように自らに課した」[P. 31]人間になることであった．18世紀プロイセン独特の状況において示された極端な禁欲の形姿は，対抗すべき相手であるか否かにかかわらず，あるいはまた対抗するがゆえに，影響を及ぼして，いまや，崩壊しつつあるものを担う人物の姿勢を「合理化」する．逃れることのできない義務を負い，勤勉に雄々しく職務を遂行すること，それ自体がいまや意味をもつのである．何のための勤勉か，勤勉な職務の遂行の結果はどうであるのかということは，視界から消えていく．帝国の没落をむしろ無感動に我が身に受けて，彼自身はもやは何の責任も負うことなき存在と化している．

官吏像のもつ禁欲的姿勢についていまこのような想定を行なうのも，『フリードリヒと大同盟』を書いたトーマス・マンの小説の主人公たちを思い起すからである．すなわち，プロイセン的な厳格な姿勢が，生の衰退を感じる者の内面を支える独特の形式となっていることを思うからである．あの北ドイツの商家の没落を描く『ブッデンブローク家の人々』(1901)のなかのトーマスについて見れば，彼は，頽廃のなかで自己の情念に支配されて道化的になっていく弟とは異なり，生の衰退を感じ，己の仕事に内的には空虚を覚えながらも，自虐的なまでにきびしく己の役割を受けとめ，一家の長としての威厳を保ち自己の義務を果たしていく．しかしトーマス・ブッデンブロークの生活は俳優の生活と少しも変わらなくなった．つまり「空疎感は，

どんな犠牲を払ってでも体面を守ろうとする義務感に結びつき，(・・・)『体面』をつくろうという烈しい義務感，粘りづよい決意に結びついて，生活を演技に変えさせ，(・・・)どんな小さな動きも，演技に変わってしまい，神経を緊張させ，精根を使い果せた.」[10]自力で，神の力も借りずに，自分一人の力で，休みなく，ひたすら努力をつづけて，内的荒廃の極に達したときに彼は突如死ぬ．厳格な規律，つまりプロイセン的姿勢によって身を持し義務を遂行する主人公の問題性を，マンはさまざまのヴァリエイションのなかで描いていく．トーマス・ブッデンブロークを，マンはドイツ的市民であるばかりでなく現代的ブルジョワでもあるという[11]．現代資本主義的営利を追求する人間，禁欲的な職業義務理念をもつブルジョワはプロテスタンティズム倫理の産物であるという考え方を，独力で，読書に頼らず，つまりマックス・ウエバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1905)を読まずして，直接的洞察によって感じとり，形象化したというトーマス・マンは，ニーチェを介して問題を深めた[11]．彼は独特のパトスをこめて，このように疲労の極にあってなお仕事をする人物を業績重視の倫理家，すなわち「業績の倫理家」，あるいは「弱さのヒロイズム」と呼ぶ(P. 120)．マンにおいてこれはデカダンスのドイツ的克服を意味してもいたのである．

官吏像ということで，われわれは一旦，フリードリヒに，時間的差を越えてフランツ・ヨーゼフを近づけた．それによって両者の相違はしかし，いっそう明らかになってくるのである．国家第一の僕として非個人的存在に我が身を押し込めることによってむしろ国家の諸事万端をみずから決定し，その日々の決断と行動においては極端なまでにエゴイスティックで異様にエネルギッシュであったフリードリヒにくらべると，フランツ・ヨーゼフ皇帝は余りにも重く硬直したままである．疲労の極にあってなお歯をくいしばり仕事を続ける業績重視の倫理家についてマンの描く内的荒廃からすると，そうした内的混沌とは無縁にも見えるほどにオーストリアの皇帝は，麻痺したように，無感動な表情を見せて不動の姿勢をとり続けている．「皇帝の目は再び，いつものように遠くを見つめていた．その遙かかなたには，永遠の国がかすかだがすでに浮かび上がりつつあった．皇帝はそのとき，一滴のガラスのように澄んだ鼻水が鼻の下に出ていたことに気づかなかった.」[P. 373]ヨーゼフ・ロートの長編『ラデツキー行進曲』(1932)から引用しつつ，マグリスは，こわばったような老皇帝の「痛ましいばかりの沈静の雰囲気」に言及する．帝国の終焉を肩に負う皇帝は，オーストリア的な政治的「不動主義」のきわめて人間的な体現として捉えられている．このような不動主義を敷衍すると，「秩序とヒエラルヒーに対して働く感覚，あらゆる巨人的精神に対する嫌悪，事態の積極的な変革の断念」ということにもなり，こうした心性が純化されて，官吏という人間像において具現されるのである，とマグリスは見る[P. 30]．

そのようなオーストリア的官吏像は，グリルパルツァーにはじまりムージルにいたるまで，オーストリア文学の全体を通じて幾度となく出現するのであると，マグリスは言う[P. 30]．グリルパルツァーにはじまるということは，それ以前はどうであったのか．

オーストリアの文学において官吏が重要な位置を占めるということは，この国の市民階級の成熟せぬ状況とかかわる．マグリスの叙述を引くと，帝国内における産業資本主義の立場に立った新しい階層を育成しようとしたマリア・テレジア時代の試みは結局挫折する．貴族階級と中産階級との接触，ないし妥協の仕方は，「官服をまとった市民にほかならぬ官吏，およびその階層において映しだされる．国家に仕える道具となり，また社会の上と下とを司祭のように仲介した官吏階層が，市民階級の代理をつとめた」のだった．そしてこの国家権力の走狗，監視者とみなされる官吏に対して「文学的には散発的なあてこすり」しか見当らなかった[P. 87]．しかしグリルパルツァーはそうはしなかった．1813年以来43年におよぶ官吏生活を一方で送った，まさしくオーストリア独特の官吏作家であった彼は，「官吏」を，オーストリアにとって内的に重要な存在として捉え形象化したのであった．

その戯曲『主君の忠実な下僕』(1828)を取り上げてみよう．そこにはポジティヴな官吏像が描かれている．

ハンガリー王の老顧問バンクバーヌスは，旅に出た王より国を任せられる．老顧問官の妻は若い．王妃の弟が彼女に横恋慕し，貞淑な彼女の拒否にもかかわらず執拗に迫る．夫の顧問官にも挑戦的な態度をとる．しかしこの主君の忠実な僕は，日々，王からあたえられた己の義務の遂行に専心し，彼の妻が王妃の弟の奸策に陥り，ついに殺害されるという事態になっても，日常の職務を怠ることなく，彼の支持者たちが，妻を殺害した王妃の弟を捕らえ，彼に復讐を促したときに

は，判決は王のみが行なうべきものであるとしてそれを拒否する．彼には，そのような個人的復讐が内乱のきっかけになることに，つまり国の秩序を乱すことに，心底から怒りを表わすのである．「わしがお前たちと一緒に反乱をおこすのだと．平穏を求め，平和の番をするこのわしが．(･･･)内乱こそ，呪わしいもの」と[P. 166]．

バンクバーヌスは，「ヨーロッパの平和と平穏と秩序の維持，つまり固守の政治」を政治原則としたメッテルニヒと類似するところから，この作品はしばしば権力への追随という非難を受けることになったが，マグリスはそういう捉え方に与しない[P. 166]．マグリスは，独特の共感をもって次のよう言う．「生成と変化の破壊的な歩みを阻止する」主人公のこの姿勢を理解しない者，「固守する」こと・「忘れない」ことに人間的尊厳を求めるオーストリアの官僚の情熱を彼の日常の規則的営為の内側に見ない者の目には，「バンクバーヌスの行動はただ愚かしく滑稽に映るだけであろう」と[P. 165]．それというのも彼はバンクバーヌスにハプスブルク帝国の官僚の重要な要素を見るからである．すなわちマグリスは，彼らの形式主義への情熱には，「ほとんど宗教的なニュアンスがこめられている」として，「位階制的秩序に対する，多分に宗教的なものを含む献身」をそこに見て取りつつ[P. 166]，次のように二面的把握を示すのである．このようなオーストリアの官僚は，「帝国の保守的な社会システム，つまりメッテルニヒが考え出し遂行する社会体制固守の政策のかなめ」であり，オーストリアにおいては「なかんずく形式手続きの墨守とその事大主義的神秘化が際立っていた．」しかし，バンクバーヌスが体現しているのは，「いまや伝説的になった，オーストリア官僚の積極的な面，つまり非党派的で良心的な正確さ」であると[P. 167]．

このオーストリア官僚の積極面についてマグリスが例として示すものは，多民族国家オーストリアの知識人のある特徴を表わしているので，引用しておこう．そこにはトリエステ生まれのマグリスの精神空間が感じられるのである．

すなわち，トリエステ生まれの作家でイレデンティスト(第一次大戦前のイタリア統一運動の運動家)であるシルヴィオ・ベンコ(1874-1949)を追放するにあたって，トリエステの総督は「このような措置を講じなければならないことについて個人的に遺憾の意を表した」ということである．時代の激流のなかのささやかなエピソードであるが，これをマグリスは以下のように捉える．「このような官僚たちの神話によって，この国は生きていた」のであり[P. 167]，「こうした高潔な態度と品位ある教養人の神話は，敵の意識をも捉え，オーストリアの敵対者，とくに(･･･)トリエステの作家たちをも感嘆させ魅惑するのだった」[P. 168][12]と．

「秩序」という理想が今日においていかに非現実的であるかを苦痛をもって認識することから，このような人物においてはつねに「断念と諦観」「中庸と断念」がつきまとう．『貧しい辻音楽師』(1848)の主人公もまた「いじらしいほどに堅苦しく官僚的に品位の保持に心を砕いて」[P. 171]いる人間であるが，「忠実な下僕」よりも内省の色濃く，マグリスの共感はそのような悲劇性に注がれる．そして彼の叙述は，「最もハプスブルク的な悲劇」である『ハプスブルク家の兄弟争い』(1848頃)において最も力がこもってくるのである．主人公皇帝ルードルフ２世はハプスブルクの運命を見事に表現する．

ところでマグリスは「序論」から，官吏像－フランツ・ヨーゼフ－グリルパルツァーの作品，というこの連関性を一度として崩さずにいる．しかしグリルパルツァーの作品の大部分は年代的に見れば，ビーダーマイヤー時代に成立したものである．つまりフランツ・ヨーゼフが即位する1848年以前のものであり，1848年頃に書き上げられた『ハプスブルク家の兄弟争い』は彼の死後，遺稿として見つかったものである．マグリスが彼をフランツ・ヨーゼフ神話と重ねて解釈していくのは，「ハプスブルクという大きなテーマと情熱的に結びついたこれらの悲劇は，精神的には1848年以降に属するのである」，と考えるからであり，グリルパルツァーの戯曲がその成立時の歴史的条件に影響されながらも，それら作品の作り出すハプスブルク世界の像が第一次大戦勃発にいたるまで神話としての有効性を保つのだと彼は見るのである[P. 148]．

さて，『ハプスブルク家の兄弟争い』のルードルフ２世は「荒々しい混乱した，新しい時代」の到来を予感し，巨大な内乱(三十年戦争)の発生を憂慮しつつ，それに対して何ら措置も講じない．「新しいものが迫ってくる．老いつつある世代は死に絶える」と．包括的普遍的秩序を破って「個」が勝手な行動に入る分離独立主義，自我の飽くことなき追求と権力志向，その

ようなダイナミックな動きを彼は嫌悪する．しかし彼はそれに対していかなる行動にも入らない．じっと動かぬ，決断せぬ皇帝は，「前進であれ後退であれ，その一歩が破滅を招くという状態があるものだ．そうしたときは静かに身を持して待つのがよい」と言って，静かな皇帝は行動せぬ己の態度を意味づける．無力を意識する者の非行動と静寂主義がハプスブルク的徳目とされ，「荘重なる静力学」「不動主義」「中庸」が，一見時代に逆らいながらより深い人間的な知恵として表現される．「わが家は永久にとどまるであろう．(･･･)賢明に，しかし愚をよそおい，(･･･)永遠の自然の歩みにならっているからである．」この台詞を受けてマグリスは言う，「この愚へのパトスは(･･･)没落しつつある帝国が己を飾る栄光の主題となる．しかしこの言葉のなかには隠された苦悩が，権力とは苦しみの十字架として背負うべきものだという考えと運命に打たれた支配者の観念がひそんでいる」と．そしてこのような支配者の捉え方が，言うまでもないでことあろうが，フランツ・ヨーゼフ神話の特徴となることをマグリスは言い添えるのである[P. 192]．

最後に，「彼は犠牲者だった」というフリードリヒについてのトーマス・マンの言葉をここに持ち出してよいであろうか．「彼に哲学者たることは許されず，王であらねばならなかったのだ．」自己犠牲が他者に対する仮借なき犠牲の要求に転じることはスターンがヒトラーにおいて認めている．しかしフランツ・ヨーゼフ像においては，そのような転換を，どこかでしぶとく生じさせないものがある．マンはいかにもマンらしく，「この試練に耐えるためには，･･･受動的でしかも能動的性格や，大いなる堅忍持久の精神と創造的活動的エネルギーが必要であった」と言うが，二面的要素のうち，その対となっている一方がここには欠落しているのである．ハプスブルク的徳目は限りなく受動的である．

マグリスも「犠牲」を取り上げるている．「帝国は『国民の聖なる犠牲』を要求したのである．それは『安易な自己主張を断念することであり，感情の高ぶりと自己の血の本能とに身をまかせるような行動を断念すること』であったと[P. 24]，あくまでも受動的である．ということは，哲学者から権力者への，反マキアベリ主義者の極端なマキアベリ主義者への，弱さのヒロイズムにおける弱さから通常以上のものへの転換は，ここでは生じないのである．近代はさまざまのものを，自己の弱さを，克服してきたのであるが，ここでは，克服が条件になってはいないのである．行動の断念の一方には何もない．だがこの無が意味をおびる．ルードルフ2世は自己のあり方を次のように述べるのだ．「私はこの束をたばねる帯だ．それ自体何も生むことはないが，たばねるためにはなくてはならない．」[P. 193][13]それ自体不毛である．存在の内部の空虚．この空洞を他方にいだくがゆえに，無限に断念し，無限に耐えうるのではあるまいか．

内部の弱さを克服して義務を果たしつづけた北ドイツの商家の家長トーマス・ブッデンブロークは，しかし，その疲労の限界に達したとき，たった一本の歯を抜いたのがきっかけであっけなく死ぬ．その死の姿は彼の誠実な生き方を冷笑するがごとくグロテスクですらあった．抑圧されていた内部の混沌がいまや一気に噴出し彼を崩壊へと導いたかのようであった．しかしこの19世紀の終わりの禁欲的な業績第一主義(プロイセン的姿勢)は今日，もっと洗練され，精密化され抽象化されて近代の業績を支えているのではあるまいか．そこではトーマスに見られる内面の苦悩の発露すら現代のシステムのなかで巧みに隠され解消された．　しかし一方，無限の断念，無限の単なる忍耐はどうであろうか．皇帝と帝国もまた滅亡したのだが，この何ものも生まない断念の姿はどこで受け継がれているのであろうか．「逃避」ということですむのであろうか．

フランス革命によって近代国家の基礎が置かれ，またヘーゲルによって国家が絶対的理念の担い手として理論化されたあとで，オーストリアの詩人グリルパツァーにおいては，「実質なき権力と神の秩序の体現を二つの柱にした国家」の理想化が行われ，こういう形で国家のイメージが作り上げられていたことをマグリスは指摘しているが[P. 161]，グリルパルツァーのそうした創作のなかには近代化に対する独特の危機意識が働いていることは見逃せない．ハプスブルク神話はこの神話独特の仕方で，いわば反近代的仕方で近代の問題にかかわっているからこそまた興味深いのである．

注・a

1 Magris,Claudio:Il mito absburgico nella letteratura austriaca moderna (1963)．独語訳は1966年：Der habsburgische Mythos in der österreichischen

Literatur.『オーストリア文学とハプスブルク神話』（鈴木・藤井・村山訳）書肆風の薔薇1990年．前回通り，本書（翻訳）よりの引用頁は［　］で示す．その他の資料よりの引用は（　　）で表示．

2 『詩と真実』菊盛英夫訳，「ゲーテ全集」第9巻，人文書院1968年．なお（　）内のP. 244は，当該書のページを示す．なお，翻訳のあるものについては引用は訳書より行なった．

3 Mehring, Franz: Die Lessing-Legende. Zur Geschichte und Kritik des preu-Bischen Despotismus und der klassischen Literatur. (1893) Berlin 1953.

4 Scherer, Wilhelm: Deutsche Literaturgeschichte. (1883)『ドイツ文学史』吹田順助監修，創元社1949年．第三巻，P．3～240.

5 Die Idee der Staatsräson in der neueren Geschichte (1924) フリードリヒ・マイネッケ著，岸田達也訳『近代史における国家理性の理念』中央公論社・世界の名著，昭和44年 P. 49～422.

6 Mann, Thomas: Friedrich und die groβe Koalition. (1941)『フリードリヒと大同盟』(1914)，青木順三訳，「トーマス・マン全集」第10巻，新潮社1972年 P. 52～101.

7 Stern, P.: Hitler: The Führer and the People. (1975)『ヒトラー神話の誕生』山本　尤訳，社会思想社1983.

8 これについては，「オーストリア文学ノート(1)――オーストリア文学の概念/その静的様相――」『横浜経営研究』第X巻，第1号(1989) P. 80～81参照.

9 Wandruszka, Adam: Das Haus Habsburg. Die Geschichte einer europäischen Dynastie. Köln 1968.『ハプスブルク家――ヨーロッパの一王朝の歴史』江村洋訳，谷沢書房1981.

10 Mann, Thomas: Die Buddenbrooks. (1901)『ブッデンブローク家の人々』望月市恵訳，岩波文庫（下）P. 155.

11 Mann, Thomas: Betrachtungen eines Unpolitischen. (1914-18)『非政治的人間の考察』森川俊夫訳，「トーマス・マン全集」第11巻，新潮社　1972, P. 120.

12 これについては，「オーストリア文学ノート(2)――C. マグリス著『オーストリア文学とハプスブルク神話』について[一]――」『横浜経営研究』第X巻，第1号(1991) P. 71～72に紹介した，トリエステ生まれの作家ビアジョ・マリンについてのマグリスのエッセイを参照．マグリスの見る中欧世界が描かれている．

13 上掲の「オーストリア文学ノート(1)」P. 82～84参照.

〔ふじい　ただし　横浜国立大学経営学部教授〕